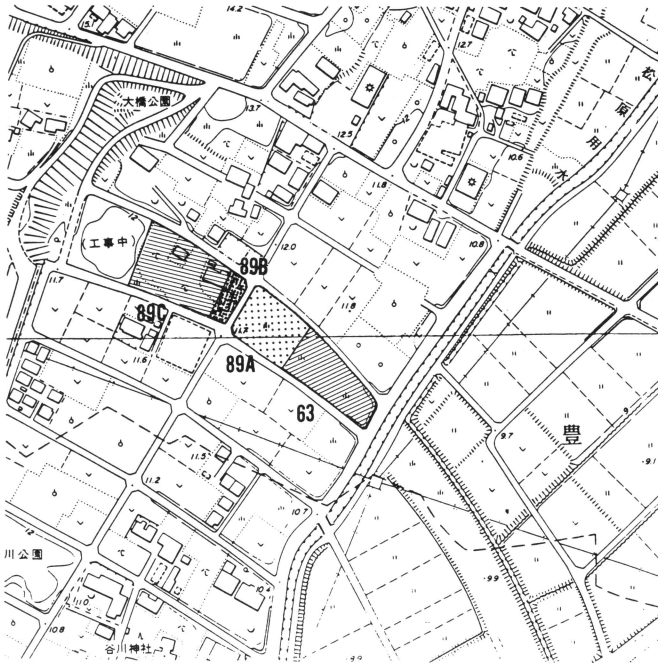


あ そ う だ おお ば し
麻 生 田 大 橋 遺 跡



第1図 調査区位置図 (1/5000)

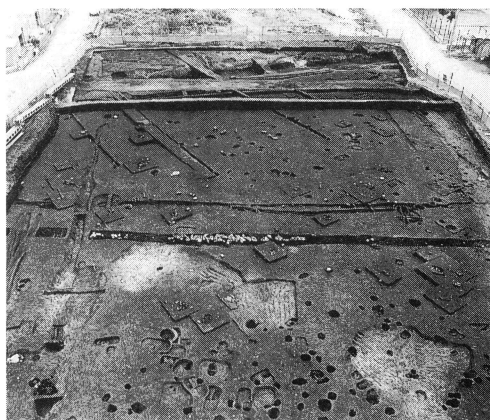
調査の経過

麻生田大橋遺跡は、東名高速道路豊川インターチェンジの南約500mの豊川市麻生田町大橋に所在する。遺跡は、豊川右岸の洪積台地(幅500mほどで、南北に細長くのびる)の東端に位置する。この台地は、標高約11~12mの豊川の低位段丘であり、現在は、大部分が畑地で、果樹園・ビニールハウス・宅地等に利用されている。遺跡の西側には、豊

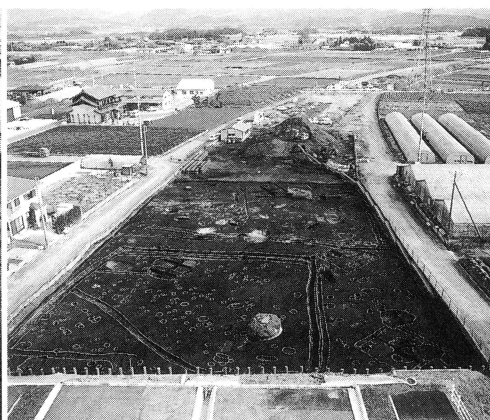
川の市街地をのせる中位段丘が展開し、比高は10mである。この段丘上には、上野古墳群・円福寺古墳群が築かれている。また、遺跡の東側は、松原用水をはさんで沖積低地がひらけ、水田が営まれており、低位段丘面との比高は、2.5mを測る。

当遺跡は、昭和12年頃発見され、市道北側に所在する麻生田当貝津遺跡(縄文時代中期から晩期後葉)と合わせて麻生田遺跡と総称されてきた。豊川市教育委員会では、大橋地区の区画整理事業に伴う事前調査として、昭和52年から平成元年にかけて、13次にわたって発掘調査を実施している。調査面積は、総計約5000㎡である。調査の結果、麻生田大橋遺跡は、縄文時代晩期後葉、古墳時代、中・近世にかけての複合遺跡であることが確認された。とくに、縄文時代晩期後葉から弥生時代初頭にかけての土器棺墓の検出が100例を越え、縄文時代から弥生時代への推移を究明するのに重要な資料を提供する遺跡として注目されるようになった。

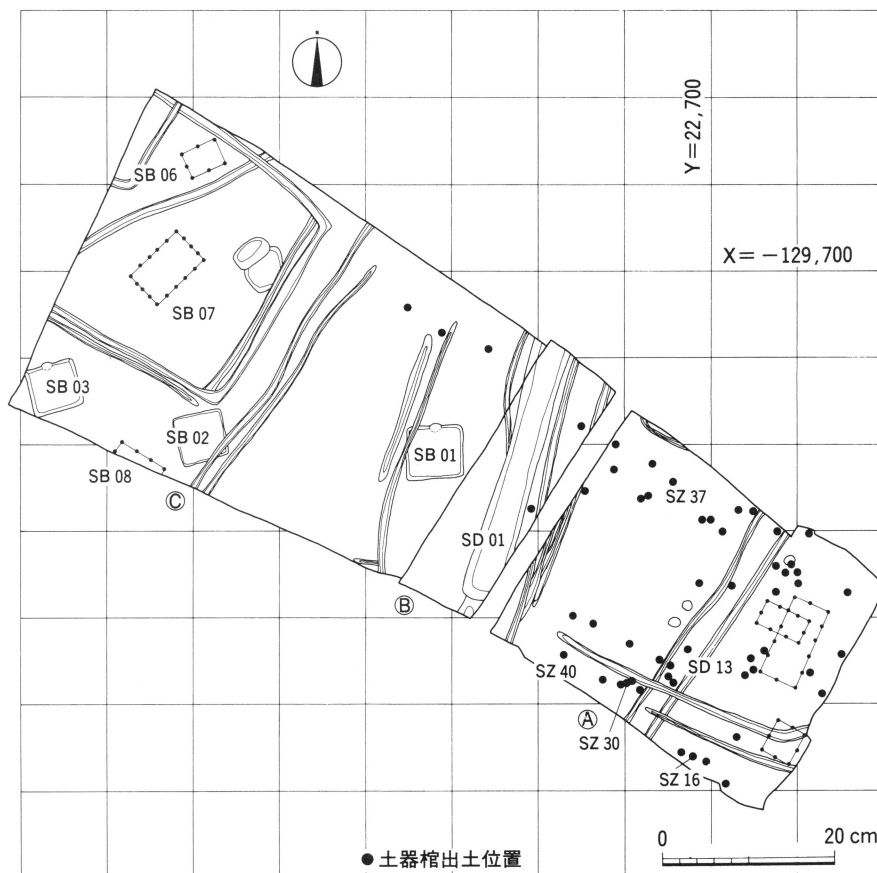
今回の発掘調査は、県道東三河環状線の建設工事に伴う事前調査として、昭和63年度に引き続き実施されたものである。本年度は、4月と11月の2期に分けて、A・B・C3地区の調査を実施した。



A区 全景（東から）



C区 全景（西から）



第2図 遺構配置図 (1/800)

調査の概要

調査区の基本層序は、上層から、表土・耕作土→黒色土（豊川右岸地域に特徴的ないわゆる黒ボク土）→明黄褐色土・黄灰褐色砂礫土（基盤）の順である。遺構は大部分が黒色土層から掘り込まれているが、木・竹の根や耕作等による攪乱がひどく、黒色土内での検出は困難で、明黄褐色土の上面（黒色土の浸透層）で検出せざるをえなかった。

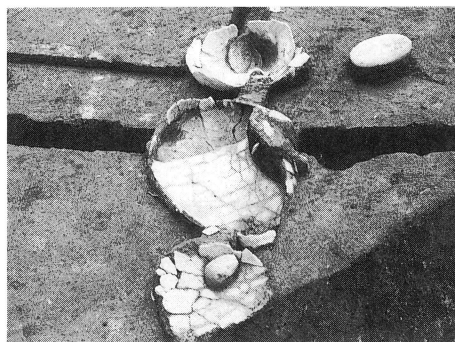
今回の調査で検出された遺構・遺物は、縄文時代晩期後葉から弥生時代初頭（Ⅰ期）、古墳時代後期（Ⅱ期）、中・近世（Ⅲ期）の3つの時期に大別できる。以下、各調査区ごとにその概要を述べる。

A区

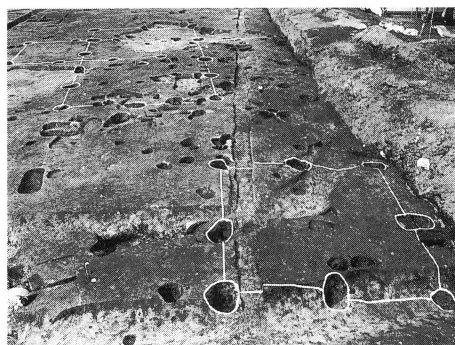
Ⅰ期 土器棺墓51基・袋状土坑4基を検出した。残存状態が悪く、完形に近い形で検出されたものは数個体にすぎない。遺構の掘方もわからないものが多く、明確な掘方を検出したものから推測すると、棺身の土器より少し大きめの穴を掘り、片側の立ち上がりにびったり寄せ、横ないし斜めにねかすように土器を入れている。今回、立位の土器棺墓は検出されなかった。埋葬の方法は、単棺もあるが、深鉢・甕の底部や鉢で蓋をしたものも多い。土器棺に使われた土器の器形には、甕・壺・深鉢があり、縄文時代晩期後葉からの五貫森式～水神平式にかけての突帯文系・条痕文系に属する時期のものである。土器棺墓は、調査区西側中央部を除き、ほぼ全域にわたって分布するが、樫王・水神平式のものが全域にあるのに対し、古い時期の五貫森・馬見塚式



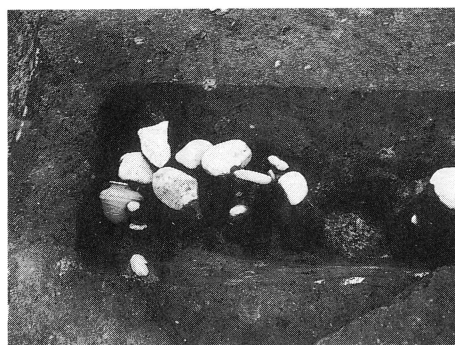
A区 SZ16出土状況



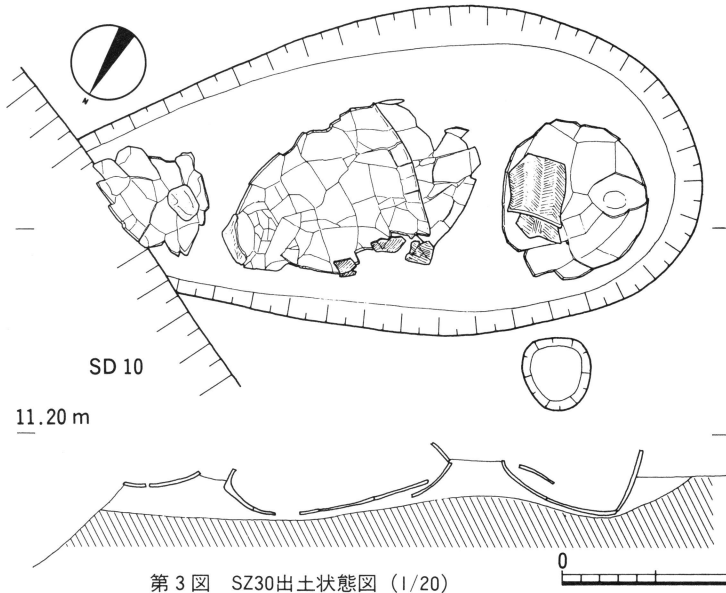
A区 SZ30出土状況



A区 掘立柱建物群



A区 SD13遺物出土状況



第3図 SZ30出土状態図 (1/20)

III期



B区 全 景 (北から)

のものは北側に集中する傾向がある。袋状土坑は、径1.2 m、深さ1 mほどの円形の土坑で、底部が外に開き袋状をなす。埋土内からは、少量の縄文土器片が検出されたのみで、貯蔵植物等の痕跡は認められなかった。

掘立柱建物3棟、溝状遺構10条、土坑多数を検出した。掘立柱建物は、1間×3間、2間×5間、2間×2間の大きさで、調査区東側の溝状遺構に区切られた方形の区画内に、溝とほぼ同じ方向で建てられている。溝状遺構は、東側と西側の2群に分かれ、2本1セットとなり、群ごとに一定の方向を指向している。何らかの区割りを示す遺構だと思われる。土坑の中には、1.6×0.8mの隅丸長方形のプランを持ち、土師質の皿・近世陶器等に

混じって人骨が検出された墓坑を思わせるものや、径1 mほどの円形とした掘り込みの中に多数の礫や中世の灰釉系陶器が入ったものもある。

B区

I期 土坑棺墓2基を検出した。樫王・水神平期の蓋をもつタイプである。

III期 溝状遺構8条、土坑多数を検出した。SD01は、幅4.0m、深さ1.8m、断面逆台形を呈する屋敷地の堀を思わせる大溝で、埋土上面からは多数の縄文時代石器類を含む礫群に混じって、近世陶器・陶磁器類、土師質の皿、中世の灰釉系陶器が検出された。下面は遺物が少なく灰釉系陶器が少量出土した。

C区

I期 土器棺墓2基を検出した。馬見塚・檜王期のものである。

II期 竪穴住居3軒、溝状遺構1条を検出した。竪穴住居は、1辺6mほどの隅丸方形で、主軸はほぼ北を向いている。北壁中央部にカマド跡の残るもの(SB01・02)と破壊され焼土だけ検出したもの(SB03)がある。床面は、後世の攪乱を受けて残りが悪い。出土遺物には、須恵器の蓋杯・高杯・長頸壺・甕・土師器の甕・壺・甑等がある。出土遺物から、3軒とも7世紀代の竪穴住居と思われる。

III期 掘立柱建物3棟、溝状遺構15状、土坑多数を検出した。掘立柱建物は、2間×3間、4間×5間の大きさである。南にある1棟は、調査区外にのびるため大きさは不明である。溝状遺構は、A・B区と同じく2本1セットになって一定の方向を指向している。掘立柱建物を囲う形で“コ”字形にめぐる溝があるが、建物の軸と方向にずれがあるため同時期のものとは思えない。SK90は、径1mほどの円形の土坑で、A区と同様、礫群に混じって灰釉系陶器碗・皿・片口鉢が40個体以上検出された。

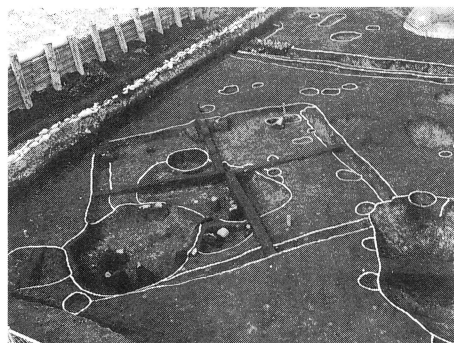
まとめ 今回の調査で、古墳時代後期の遺構

が新たに検出され、遅くとも7世紀代には居住域として存在したことが確認された。また、麻生田大橋遺跡では、約250基の土器棺墓が検出されている。遺跡の状態を考えれば、さらに多くが存在したのは確実である。縄文から弥生への移行の時期にもかかわらず、この遺跡では土器棺墓という墓制を頑なまでに守り続け、弥生時代中期に初めて方形周溝墓を取り入れるのである。今後、この土器棺墓のあり方を詳細に検討することにより、東三河地方の縄文時代から弥生時代への移行の過程の一端が明らかになると思われる。

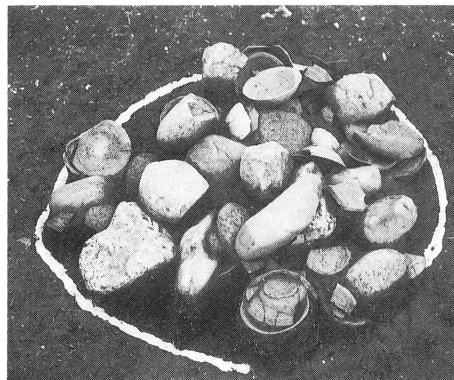
(安井俊則)



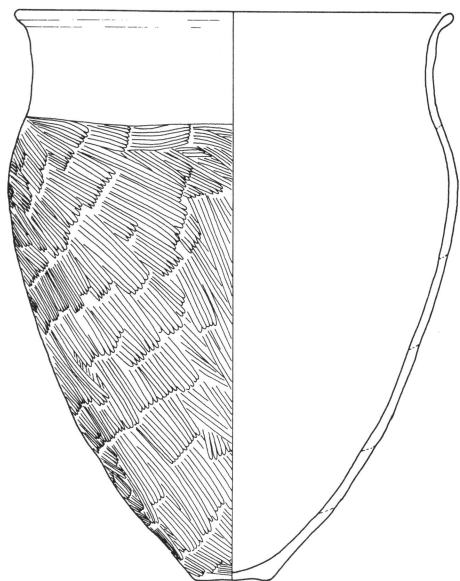
C区 SB02出土状況



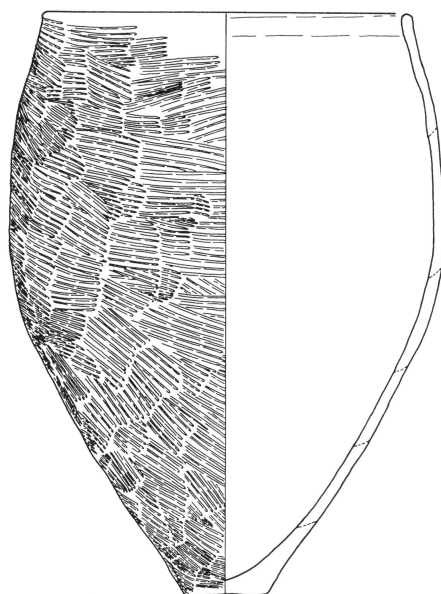
C区 SB03出土状況



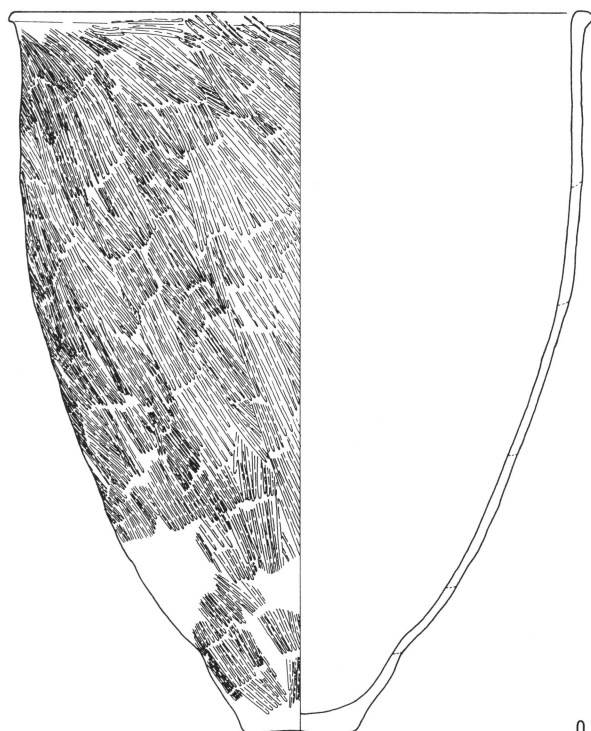
C区 SK90遺物出土状態



A 区 SU 37 棺身



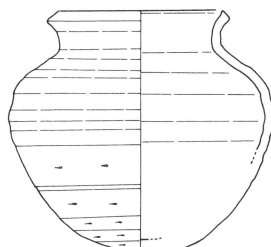
A 区 SZ 40 棺身



A 区 SZ 30 棺身



C 区 SB 01



A 区 SD 13



第4図 出土遺物 (1/5)